

第1節—2 粘土遊びの発達研究と粘土遊びをしながらの独り言の研究

山村雅宏

要約

粘土遊びを通して考え、感じて、行動するという子どもの特性を見出すことに努めた。子どもが無心になって粘土を丸めたり、伸ばしたりしていることは心地よい行為として認め、なぜそうした行為に心が惹かれるのかを洞察することである。ものに向き合い、自分の世界に浸り、自らの感覚と感じたことをイメージしていく、独り言を言いながら楽しく造る姿を観察した。粘土の使い方も一人ひとり力を加え方が違い、丸めて団子にしたり、縄のように細長く自由に変化させたりして造っては壊し、また新しいものを造るなど自分の心持の応えてくれる「応答的環境」を整えることで造型の知恵が獲得されると考えた。

キーワード

粘土、考える、感じる、行動する、応答的環境

1. 研究の目的

(1) 研究目的1

粘土遊びをしながら自分の世界に入りつづやく子どもと、集団の中での個人の作業であるため、他への話しかけをする子どもがいる。児童の独り言を通して年少児、年中児、年長児の心の動きを知ろうとする。

(2) 研究目的2

粘土遊びの手法は手や指の動きと対応して単純なものから複雑なものへとある程度発達的な変化がみられることについて実技により調査する。

(3) 研究目的3

3歳児・4歳児・5歳児にこれまで見たこと、感じたこと、想像したことをもとに自由に行動させ創造性の発達を見る。

2. 研究の方法

(1) 準備

粘土は彫塑用粘土を使用する。一人当たり1kg。粘土板の上に置く。(へらなどの道具は使わない)

(2) 対象

3歳児8名、4歳児8名、5歳児8名を選ぶ。幼児の選定は各クラスから無作為に抽出した。作業の順序は、4歳児、3歳児、5歳児の順に行った。

(3) 作業開始まで

①幼児は片側4人が座り、向かい合いに4人が座って8人で同時に作業を行う。

②教師から「これから粘土で自分の作りたいものをなんでもいいから作りなさい。」「時間は15分間です」と指示する。

③15分間で出来た一人ひとりの作品を粘土版に載せて教師が集める。集めた作品はすぐにカメ

ラで撮影しておく。

3. 研究の内容

(1) 3歳児

粘土を板の上に置くと手ですぐに「バタ・バタ・バタと粘土をたたき始める。20～30回位たたくと端を千切ってまるめる。千切った粘土を棒のように伸ばして数本作る。

女兒は丸めた粘土を並べる、男児はたたいた粘土を少しずつつまみ出して形を作ろうとする。どの子どもも、ほとんどが粘土を丸めること、指をつっこむこと、伸ばすこと粘土板に千切って並べる。手先の使い方は握ることが中心で細かな動かし方は無理である。

(2) 4歳児

粘土をたたく子もいるがほとんどがすぐに形を作り始める。大きくまた、小さく千切って丸め並べる。粘土を大きくちぎった男児は怪獣のような形にして、その上にさらに棒状に伸ばした粘土を輪にして重ねている。ある女兒は千切って丸め、それを重ねて人形を作った。また、小さい粘土を丁寧に繋げて、お弁当箱作る子もいた。男児は千切った粘土を棒のようにして、人間にしようか動物にしようか迷っている。怪物を作っていた子どもは、自分のイメージと違うのかすぐ壊してしまい、今度は別の動物を作り始めた。4歳児は中心にするものを置いて、ちぎったものをつなぎ合わせたり、重ねて継ぎ足したりしている。作っては壊していることは、自分が作るものをイメージしていると考えられる。

指と手を使ってうまく作品を作れる。小さく千切ってくっつけられる工夫ができるようになってきている。

(3) 5歳児

粘土が配られても3・4歳児のようにすぐにたたくことはしないで、平たく伸ばしながら考えている。そして一気に自分のイメージの作品に取り掛かる。

粘土の千切り方も、必要に応じた大きさに千切ることができる。また粘土版をうまく利用して、物語などイメージしたものを粘土でつなぎ合わせ、粘土板の上にデザインするように一つの模様を作った。粘土版をベースにして重ね合わせてお城のように作るなど粘土版と一体化した作品を作る子どもがいた。一度作っても何度でも作り直す男児もいた。人の顔、まるめて卵、ホットケーキ、蛇、亀など次々に作り創造性のたくましさを感じた。5歳児には作品に名前をつけたり作品のイメージを他人に話したりすることができるようになる。

指と手を上手く使い、千切った粘土を片手で重ね合わせ作り上げていくことができる。

4. 観察と評価

幼児の粘土遊びを観察し、その特色を述べる。

- 1) 粘土を手にしたら、粘土板の上でバタ・バタ・バタと 20～30 回たたく。
- 2) 両手でつかんで煉る。
- 3) 指でつまみだす。
- 4) 両手で丸める。
- 5) 片手で紐にする。
- 6) ちぎってくっつける。
- 7) 積み重ねる。
- 8) 指で穴をあける。

5. 結果・考察

(1) 作品について

- ①3 歳児は、男子は粘土を両手で丸めて塊を作り、指でひねり出しながら形を作る子どもが多いが女子は丸めた粘土を集めて並べる動作が多い。
- ②4・5 歳児は、作ろうとするものの部分を予め作り、それを順につなぎ合わせて「ひと」や「動物」「お菓子」などを作る子どもが多い
- ③3 歳児は男子と女子では作るものが違うが、自分のイメージを形にするまでには至らない。
- ④4 歳児はすぐに自分のイメージを実現しようと大きくちぎり怪獣などを作るがうまくいかないのか、イメージと違うのか声を出しながらまた丸めてはすくる。自分で楽しく作ることができる。
- ⑤5 歳児は手先を使い自分のイメージを一つずつ作成していく、粘土板をベースにしてお城などを作り物語にしていく能力が見られた。



図 1



図2



図3

(2) 粘土遊びをしながらの独り言

①課題設定の理由

粘土遊びをしながら自分の世界に入りつづやく子どもと、集団の中での個人の作業であるため、他への話しかけをする子どもがいる。児童の独り言を通して3歳児、4歳児、5歳児の心の動きを知ろうとした。

②ひとりごとの聴取

1) 3歳児

女兒：粘土をパタパタとたたきながら、よんで見たも、おばあちゃんとみよ、船橋のおばちゃん、船橋のおじちゃん行かなかった。

ねね、粘土どこで買ったの。みよ、赤、ピンク、青、黄色もあるよ、みよピンク、たいまなから、みよ、しょうじした、もっと大きいのでつくっている。ヤッター、えんじー、おせんべい、お豆、これお豆もっと小さいの、みよのちゅう位のお豆、できた。お豆好きだ。

女兒：ねね、水道どうやって作るの、めちゃめちゃするの、チャオ、チャオ、チャオ、水道、今度は見て水が出るとこ、みて、もっと高くなった。丸いをつくる、ちゅちゅちゅちゅちゅ

女兒：ねね、雪達磨どうやって作るの、もっと大きいの

第4章 未来型のこどもの表現力と促進法

これから挨拶する・朝だもん、こことみとだに行った。

男児：雪を作るのパパとママと行ったの

女児：ねね、たこどうやってつくるの。

カタツムリできた。カタツムリ見て見て、見て

女児：ねね、たこさんどうやって作るの。ちゅちゅちゅばんばんばんちゅちゅちゅちゅちゅ

男児：雪できた。これうどん、また何か作る

<分析・考察>

8人が向かい合って座っているため独りごとというより自然の会話になっているようである。3歳児は自己中心なおしゃべりであるが、「ね、ね。」と相手に呼び掛けていることは全く自分だけの世界ではなく他人を意識していることが分かる。

2) 4歳児

「いま冬ですから雪が降っている。」「ここはダブっているね」

「鼻が上」「鼻水が出ているの」「鼻水はここに付いたら・できた」

「ぶん、ぶん、ぶんこれ悲しい」

「声かけたら顔が切れちゃった」「本当は一本足しかない」

「鼻をほじくっている」「鼻水が出ているの」「かわいい」「ねじれてる、ねじれてる」「これお弁当の枠」「お弁当を作るの」

<分析・考察>

友達同士で作品を作りながら自分の物語を作っている。4歳児は男女の区別が分からないほど友達同士の会話になっている。

3) 5歳児

粘土をたたきながら笑い声が多い。

「全然できない」「これおしっこジャー」「小さな顔、ちっちゃな顔、もっとちっちゃなもの、ちっちゃな卵、ちっちゃなアヒルの卵、かえる食べるんだよ。」「おせんべいになった。」

「ホットケーキ、何か知っているか。」「亀こんぐらだよ。みろの亀だ。」

「ちょっと蛇・・笑い声が多い長くなっちゃった」「ぶらぶらぶら。」

「作るって難しいね。」

<分析・考察>

5歳児になると、教師に呼びかけたり、友達と話しあったりしながらあれこれ考えて作成して

第4章 未来型のこどもの表現力と促進法

いる。

年中児、年長児とも集団の中での作業のため完全に黙っている子はいなく互いのコミュニケーションを楽しみながらマイペースで作っている。

協力園では、園の方針としてコミュニケーションの中で創造性が生まれてくることを重視し保育している。例として、子どもが「これゾウさん、今度はみて、鼻が伸びているところ、見て」と独りごとのようにおしゃべりしていると、独りごとと放置しないで教師は「へー、長い鼻だね」と声をかける。そしてどんどん対話を広げ、子どもの気づきや発想を支援していることが分かる。

4) まとめ

今回の調査のように机に向かい合って座りおしゃべりしながら作業することは子どもの成長に大切なことである。子どもはいざ作ろうとしたとしても、いつも思い通りにできるものではない。テーマを決めてもイメージがわからないことやテーマを何にするかに困った時、話し合いながら友達の商品を見ながら、まねをしたり、ヒントを得たりすることが重要である。自力で育てられないものを仲間と話し合うことで創造性が生まれてくるのである。教師は子どもの気づきをとらえ、良さを褒め励ますことにより子どもの自己実現が図られると思う。

6. 引用文献

- ・福田隆真「粘土遊びの発達と基礎的技法について述べよ」(67 立体と彫刻・粘土遊び)
「美術科教育の基礎知識」宮脇 理監修 ・福田隆真・福本謹一・茂木一司編集
建帛社 2007 年

7. 参考文献

- ・最新保育講座 11「保育内容『表現』平田智久他編 ミネルヴァ書房 2010 年
- ・「粘土遊びの心理学」中川織江著 風間書房 2005 年
- ・「粘土造形の心理学的・行動学的研究」中川織江著 風間書房 2001 年
- ・「表現」 幼児造形 実習編 鯨坂二夫監修 永井 肇編 保育出版社 2004 年